

鳥の内分泌研究はや20年

和田 勝

子供の頃、ジュウシマツや伝書バトを飼っていた、伝書バトの飼育は高校まで続いた。大学に入って生物学研究会というクラブに所属して、夏休みの合宿で苗場山の生態調査をおこなうことになった。植物は駄目だったし、昆虫採集もしたことがなかったので、残った選択肢として鳥の班に入った。鳥の生態に詳しいわけではなかったので、鳥の歌の聞きなしを教えてもらいながら、いまの苗場プリンスホテルの周辺の山を歩き、どんな鳥がいるかを調査した。記録カードに添えるために、望遠レンズを買い込んで、何とか鳥の生態写真を撮ろうとしたが、なかなかうまく撮れなかった。



理学部動物学科に進んだが、学部の学生時代は鳥のことは忘れていた。大学院に進むときは、ばくぜんと行動がやりたいと思っていた。大学へ入学する前に、ローレンツやティンバーゲンの本を読んで、生物をやろうと志していたからである。しかしながら、いまでいうエソロジーをやっている講座はなかった。生理学の講座が少し行動をやっていた。そのため、研究室を決めるときにはずいぶん悩んだが、結局、内分泌の研究室に入ることにした。生理学の講座では対象は無脊椎動物だったし、電気生理学をあまりやりたくなかった。大学闘争の影響も少しはあった。

研究テーマは、長日刺激による精巣発達におよぼす、視床下部に植え込んだテストステロンの抑制効果をウズラで調べようというものだった。ちょうど指導教官だった小林英司東大教授とD.S. Farnerワシントン大学教授が主催する、日米科学共同事業のシンポジウム、鳥の視床下部とゴナドトロピン分泌機構が開催される少し前だった。そのシンポジウムでスライド映写係をやり、高名な鳥の内分泌研究者の多くを見かけた。英語ができるわけではなかったのに、スライド係をやりながら「Next slide, please」を聞き逃すまいと神経を集中させていたことを思い出す。代表者以外に、Wolfson, Follett, Oksche, Tixier-Vidal、日本側では、石居 進、田中克英、田名部雄一、中村 司、今井 清先生など、鳥の内分泌を研究している人が、アメリカだけでなくヨーロッパからも参加した。内容についての記憶はあまりないが、発表と熱心な討論が続いたのを覚えている。六本木の国際文化会館の2階のホールで行われたこのシンポジウムは、それほど規模の大きなものではなかったが、この国際集会在がどんなに刺激になったかわからない。

考えてみると、いまの僕の年齢はこのときの多くの参加者の年齢を上回っている。モタモタと何をやっているのだろうと思う。もっと元気をださなければいけない。しかしながらなんだか忙しい。昔もこんなだったのだろうか。そうだとすると、自分がだらしないことになる。今の自分のだらしないさを棚に上げて考えてみると、そのころは自分はずいぶんと生意気だったように思う。いっばしの研究者のつもりで勝手に仕事を進めていた。いまは大学院の学生でも依

巻頭言

存性が強い。このままでは、日本の自然科学はますます下り坂になるだろう。もっと違った教育研究体制と選抜制度を考えないとだめなのだろうか。

さて、博士過程でも、修士課程の仕事を発展させる形で、ウズラの光周性ゴナドトロピン分泌の研究を続けることになった。それ以来ずっと、鳥の内分泌を、特に光周期によるゴナドトロピン分泌調節、最近ではもう少し大きくとらえて、繁殖の年周期の調節機構の研究を続けている。最近、仕事がすこしづつフィールドでやる研究を取り入れる方向に移ってきた。

光周期というと、ミヤマシトドのFarner先生による一連の教科書的な仕事ですぐ思い浮かぶ。しかし、すべての鳥にミヤマシトドの結果が当てはまらないこともわかってきた。ミヤマシトドでは、生殖腺の発達は大日でおこり、そのまま長日下で飼育していると、やがて生殖腺が退化してしまう。有名な光不応という現象である。しかしながらウズラでは、このような現象は見られない。長日から単日に移しても、顕著な生殖腺の退化は見られない。短日と低温がシナジスティックに作用して、繁殖を止めることが我々の研究でわかった。最初はウズラは家禽化されているから特殊だという眼で見られたが、どうもそうではないらしい。いろいろな種を使って調べてみると、繁殖活動の光周期と温度に対する依存性は、その種の生態や分布に根差した適応戦略として進化してきたと思われる。比較とは、その種に特有な、このような適応戦略を明らかにすることだと思えるようになってきた。このような研究の対象として、鳥は非常に有用なグループである。

それにしても、日本では、鳥を研究対象として仕事をしている人が少ない。日本に博物学が根づかなかったこと、博物館が教育研究の場としてうまく発展しなかったことが原因だろうか。同じことは動物園についても言える。もっとしっかりした研究者ネットワークを作って、情報交換を行うとともに、鳥の研究が重要であるという社会的な機運を作っていくことが必要なのではないだろうか。そのためには鳥学会が果たすべき役割は大きいと思われる。

このことにも関連するが、鳥学会では生理をやっている人、あるいは関心のある人が少ない。モスクワ大会の時から、Ornithological Congressに出るようになったが、こちらには生理学の演題がたくさんあった。筆者もモスクワ大会では、シンポジウムで講演をおこなったし、その後、カナダのオタワ、ニュージーランドのクライストチャーチ、オーストリアのウィーンと、ずっと参加してシンポジウムで講演し、ウィーンではシンポジウムの一つを組織した。そんなことが念頭にあったので、1991年の5月25日に、日本鳥学会の日本比較内分泌学会の合同シンポジウム「鳥の生理学と生態学の握手」を東京医科歯科大学で開いた。一定の成果はあったが、大成功というわけではなかった。その意味で、今年度の鳥学会大会が早稲田大学で石居教授を大会委員長として行われたのは、画期的なことであった。今後も鳥学会が大きな包容力で鳥学研究者を糾合し、鳥学のおもしろさを宣伝し、学会として発展して行ったらと念じている。

筆者としては鳥の生態に根差した内分泌学を突破口として、さらに大きく種分化や進化までもが解明できる方向へ研究を進めることができたらと思っている。

(東京医科歯科大学教養部生物学教室)

関連学術会議

- | | | |
|------|--|-----------------------------------|
| 1995 | 12月3～5日 | 第14回日本動物行動学会大会 (兵庫県立人と自然の博物館) |
| | 12月6～7日 | 第18回極域生物シンポジウム (国立極地研: no.56) |
| | 12月6～7日 | 島嶼における進化 (ロンドン) |
| 1996 | 3月17～22日 | 第2回国際モズシンポジウム (エイラト・イスラエル: no.56) |
| | 3月28～31日 | 日本生態学会第43回大会 (東京都立大: 本号) |
| | 6月30～7月4日 | 第13回動物の繁殖に関する国際会議 (シドニー: no.55) |
| | 8月20～24日 | 第7回国際ライチョウシンポジウム (フォートコリンズ: 本号) |
| | 関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお知らせください (〆切: 2カ月前) | |

1995年度鳥学会早稲田大会印象記

華やかな雰囲気鳥学会大会

植田 睦之

鳥学会の大会の感想を書くことになってしまいましたが、まじめな感想は、たぶんほかのふたりの人たちが書くと思いますので、ぼくは、少しおちゃらけた感じで鳥学会の雰囲気などについて書こうと思います。

今回の大会は、いままでとずいぶん雰囲気が違いました。それは、若いおねえちゃんがたくさんいたためでした。去年、一昨年あたりから若いおにいちゃんが多いなあ、と思っていましたが、今年はおねえちゃんが増わりずいぶん華やかな雰囲気になりました。どれくらいの年齢のおにいちゃんやおねえちゃんが多いのか興味を持って聞いてみると、おにいちゃんたちは大体ぼくの1～2歳上、おねえちゃんたちは1～2歳下でした。ちなみにぼくは25歳です。

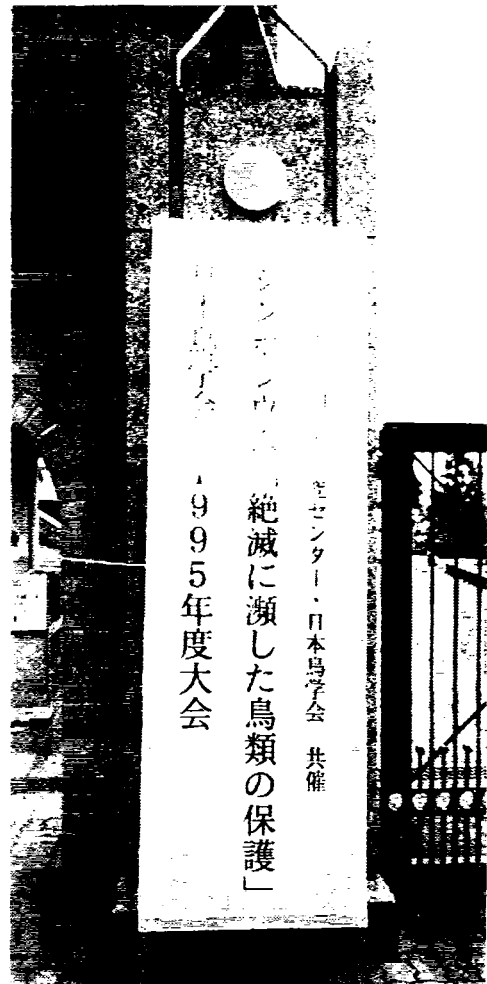
さて、おねえちゃんがたくさんいたためなのか、今年はおにいちゃんたちが元気にがんばっていました。去年までは学会に参加するおにいちゃんはたくさんいても、発表するおにいちゃんは少なかったのに、今年、発表するおにいちゃんがたくさんいました。そして、プレゼンテーションも結構わかりやすく、きれいなスライド、ポスターで発表していました。さながら、レックで踊りを競う(?) 雄たちのような感じでした。ぼくは、今回は準備不足でレックに参加することができなかった感じでしたが、来年は素晴らしい舞いを披露したいと思っております(何じゃそりゃ!)

おにいちゃんたちは、一世代上の(30～40代の)人たちと比べると、議論のしかたなどまだまだな感じだけど、これだけ若い人たちが集まっていると、鳥学会の将来も明るいのかなという感じがしました。

話しは、がらりと変わりますが、今度、鳥学会のレッドデータブックが出るといううわさを小耳にはさみました。なんでも、論文をぜんぜん書かなくなってしまった人を「絶滅

危惧種」に、論文を書く頻度がかなり減ってしまった人は「希少種」になどといったふうに指定されてしまうそうです。「お前みたいなうるさくて余計なことばかり言っている奴は有害鳥獣駆除対象種だ!!」とある兄貴に言われましたが、ぼくも最近論文を書く勢いが落ちてきたので、「希少種」に指定されないように、調査、論文書きともにがんばろうと心を新たにして鳥学会を終えました。

(日本野鳥の会研究センター)



会場となった早稲田大学総合学術情報センター
(黒田治男氏撮影)

早稲田大会 鳥学会に参加しての印象

木村 青史

鳥学会で発表するのは今回が初めてでした。昨年は自分の所属する上越教育大学が大会会場となったため事務的な仕事に追われ、発表を熱心に聴くことができませんでした。今回は聴く側にまわることができました。(おそらく発表を熱心に聴くことができなかった)早稲田の皆さん本当にご苦労さまでした。以下に、大会に参加しての感想を述べます。

現在の生態学や行動生態学は、技術的な発達を伴って、かなり細分化したテーマに分かれてきたように思われます。また、学術雑誌も多く出版されており、自分のテーマに関する情報を集め、さらに広い分野から情報を集めることが困難になってきています。私自身、膨大な情報の中から自分の分野に関連した論文を見つけるのがやっとです。しかし、これから研究を進める上で、自分の分野に関連する情報のみに目を通すだけでは、現在の鳥類学の動向を正確に捉えることは困難でしょう。大会に参加することは、新しい情報を入手することを可能にし、鳥類学の動向を正確に捉える上で重要だと思えます。

今回大会に参加して、私が始めにうけた印象は「生理的な研究が多いなあ」ということでした。それと同時に、「生理的なことと行動や生態的な分野を結びつけるとこんなに面白いことが分かるのか」という印象も受けました。大会への参加には、自分が足を踏み入れている分野の情報にじかに触れることができるという利点があります。また、実際に(ポスター)発表して思ったことですが、口頭発表に比べ長い時間、複数の人と議論することができ、研究の内容をより深めることができます。また、演者としてではなく聴く側としても深くつっこんだ質問をすることができ、自分の知識や思考をさらに深めることができそうです。

以上のように大会では、常に新しい情報が提供されているので、自分の分野をより深く充実させることや、自分が足を踏み入れている分野であっても、学問の動向を知る上で非常に重要であると思います。特に、自分自身が何か研究している場合には、発表することでいろいろな議論を通じ、研究をさらに発展できると考えます。

(上越教育大・生物)

特別講演のウイングフィールド氏(中央)と通訳を務めた和田勝氏(左)



大会印象記

馬場 隆

シンポジウム「絶滅に瀕した鳥類の保護」で幕を開けた'95年度鳥学会大会。会場の井深大記念ホールは、冷房がいささか効きすぎの感があったものの、大勢の大会参加者を迎え熱気に溢れていました。シンポジウムは、ノグチゲラの生息状況の報告やバイオテクノロジーを応用した鳥類の保護に関する発表など、大変興味深い内容でした。ただ、総合討論では今ひとつ活発な議論がなく、テーマの難しさを反映していたように思います。

一般講演はやはり生態学や行動学関連のものが大半を占めていましたが、内分泌学や自然保護を扱ったものもあり、内容も多岐にわたっていました。しかし、分類や系統関係の発表がなくて寂しい気がしました。また、会場が3ヶ所に別れていた関係で、聞けなかった講演があってとても残念でした。でも、そのお蔭(?)で専門外の分野の話を聞くことができて、それはそれで良かったと思います。

ポスター講演はとても盛況でした。いつ行っても人だかりができていて、最後まで話を聞くことができなかったものもあり、結局、予定していた講演の半分も話を聞くことができ

ませんでした。これは私のやり方がまずかったわけで、当然のことながら、効率よく講演を聞くにはそれなりのコツと慣れが必要なのでしょう。それでも、何人かの発表者からは詳しい話を聞くことができるとても有意義でした。あらためてポスター講演の良さを感じましたが、会場がもっと広ければなお良かったと思います。

最後にもう1点。特別講演のJohn Wingfield博士や自由集会(M1)のNavjot Sodhi博士のスライドは、研究の目的や結果などがスマートにまとめられていて、非常に分かりやすいものでした。特に、Navjot Sodhi博士の講演には通訳がつかなかったのも、もし素晴らしいスライドがなかったら、私のヒアリング力では内容を少ししか理解できなかったかもしれません。最近、パソコン用のプレゼンテーションソフトが利用できるようになり、誰でも美しいスライドやOHPを手軽に作成できるようになりました。事実、今大会でも質の悪いスライドやOHPはほとんどなかったように思います。ただ、遠くからだと字が読みづらいので、できれば印刷したものを配布してほしいと思います。縮小印刷をすれば、主なものは1枚の紙に納まるでしょう。

(千葉県柏市在住)



特別講演の会場風景
(左右共、中村雅彦氏撮影)

学術集会のお知らせ

日本生態学会第43回大会

一般講演の申し込み締切は1995年12月16日(土)です。講演要旨の締め切りは1996年1月31日(木)です。

日 程：1996年3月28日(木)～31日(日)

場 所：東京都立大学教養部教室棟

参加費：12月16日受付分まで5,500円；学生4,000円（当日受付6,000円）

懇親会：12月16日受付分まで5,000円；学生3,000円

お問い合わせ：〒192-03 八王子市南大沢1-1 東京都立大学理学部生物学教室 気付

日本生態学会第43回大会準備委員会

TEL：0426-77-1111 内線3742（龍井）、3762（可知）、3766（鈴木）

FAX：0426-77-2559（準備委員会あて）

第7回国際ライチョウシンポジウム

1996年8月20～24日にアメリカ合衆国コロラド州 Fort Collins にある Wildlife Research Centerで開催されます。シンポジウムの主なテーマは草原性ライチョウ生息地の断片化、小個体群（低密度、減少している個体群）の保護管理、分類学と個体群動態です。サーキュレーションについてのお問い合わせは下記まで。

お問い合わせ：〒080 北海道帯広市稲田町 帯広畜産大学野生動物管理 藤巻裕蔵

TEL：0155-49-5500, FAX：0155-49-5504

【事務局】

- 9月27日に大阪市立大学で最終の選挙管理委員会が開催されました。（出席者：江崎、樋口（行）、和田、黒島（事務局））。1995年度、会長・評議員選挙を終え、選挙の経過、問題点などを中心に次期選挙管理委員会への引継事項がまとめられました。
- 当学会も加入している「自然史学会連合会」の総会が10月7日に早稲田大学で開催されました。当学会からは会長代理として石居 進氏が出席しました。
- 中村 司氏から500,000円の寄付を頂きました。以前、氏から頂いた200,000円の寄付と合わせて中村基金を創設することにしました。紙面をかりて感謝します。
- 三富一裕氏から鳥学基金に2,000円の寄付を頂きました。紙面をかりて感謝します。
- 振替用紙の様式が新しくなりました。会費の納入などは今回のニュースに同封されている振替用紙をご利用下さい。
- 1996年1月からの常任評議員は評議員の互選により阿部 學氏、樋口広芳氏、江崎保男氏の3氏に決定しました。

訂正とお詫び

ニュースNo.56で以下のような間違いがありましたので、訂正させていただきます。

4 ページ、左列、本文2行目 熊本郡県荅北町→熊本県荅北町

鳥学ニュース No.57

1995年11月20日 発行（会員配布）

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部 動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 鶴丸二印刷

編集 江崎保男・西海 功